

江戸時代の篠栗の村々の農業の姿

『表粕屋郡戸原触郡鑑』 卯8月、粕屋町所蔵）に
 (享保20年(1735)) は、村別の職業構成と農

(表) 村別に見た農業の様子

村名	農家戸数	田畑の平均面積(反歩) ※注1	米の平均反収(石) ※注2	牛馬の平均頭数(頭)
和田	48	12.1	1.2	0.7
津波黒	27	11.1	1.3	1.0
田中	20	11.4	1.4	0.9
高田	28	7.3	1.3	0.5
萩尾	21	5.5	1.0	0.6
金出	32	6.1	1.2	0.7
篠栗	91	6.8	1.7	0.8
若杉	35	7.2	1.1	0.9
尾仲	90	10.1	1.5	0.7
乙犬	59	8.2	1.2	0.5

『表粕屋郡戸原触郡鑑』より作成

注1) 1反歩は300坪 1坪は3.3㎡

注2) 1石は10斗、1斗は15kg

業生産について記されています。今回はこの記述を読み解いて、当時の農業の生産性を描き出すことにします。

まず農家1戸当たりの田畑の平均耕作面積を見てもみましょう(表参照)。篠栗の村々の農地の大部分は水田で、畑はわずかでした。1戸あたりの平均耕作面積は、萩尾村の5・5反歩が最も少なく、和田村の12・1反歩が最大です。乙犬村の8・2反歩も、江戸時代の日本の平均耕作面積より大き

い数字です。したがって10反歩をこえる尾仲村、津波黒村、田中村、和田村の平均耕作面積はかなり大きかったといえます。

水利条件に恵まれた水田では、夏に水稲、冬に麦や菜種を栽培する二毛作が行われていました。もつとも、耕作面積が大きく二毛作も行う農家は、大変多くの労働を必要としました。そのため、水稲や麦・菜種を植える前に行う耕起(土の掘り起し)や碎土(土塊を細かくする)に牛馬を使用することで、労働力の不足を補いました。表より各村の1戸当た

りの牛馬頭数の平均を見てもみると、0・5頭から1頭です。高田村と乙犬村は0・5頭、面積が小さい萩尾村は0・6頭です。しかし1戸平均0・5頭というのは、2戸のうち1戸に牛か馬が飼われていたということ、当時の日本の牛馬飼養率から見ると、高田村や乙犬村でも牛馬の飼養が盛んだったと言えるのです。また1戸当たり平均0・8頭以上の津波黒村、田中村、篠栗村、若杉村の牛馬飼養率は極めて高

かつたといえます。牛馬は田畑を耕し、代かき(田植え前に水を入れ、泥状にかき回す)をし、荷物の運搬や厩肥の生産にも使われました。このように牛馬は百姓にとつて貴重な存在なのでした。

次水田1反歩(10アール)当たりの米の収量を見ることにしましょう(表参照)。収量が高い順にあげると、篠栗村が1・7石(255kg)、尾仲村が1・5石(225kg)、田中村が1・4石(210kg)、津波黒村と高田村が1・3石(195kg)です。これらの村の米の収量は、当時としては高い方だったと言えます。なぜならこの数字は、条件の劣る水田を含めた平均値だからです。萩

尾村は1石、若杉村は1・1石ですが、これは山間の狭小な条件によるものと思われま

以上見てきましたように江戸時代中期の篠栗の10村は、田畑の耕作面積が大きく、米の収量が高い村が多いと言えます。そして、大きな面積を耕すのに威力を発揮する牛馬をたくさん飼っていたことが大きな特徴です。当時の日本の農業の水準からみて、最も進んでいた地域であったと言つてよいでしょう。

(篠栗町文化財

専門委員 武藤軍一郎)